

弓取た手のたくましや小松曳鹿兒島八十齡山笠七十七齡衰

また奥もありてたのしや花の山夏鶯

梅さくや万代までも其句 律貫(22・ウ)

七種や幾世かはらぬ囃子振 文樹

蓬萊の松竹青き旭かな 芦舟

莞爾とはる迎へけり梅一樹 玉鳳

千代までも若き匂ひや古稀の梅 青橙

いく春も弥増梅の匂かな 太与次

松竹を世の友にして梅の花 楳主

梅か香にいつもかはりはなかりけり 忍扇

是からか見処のあり松の花 桃林(23・オ)

いく春もかはらぬ梅の姿かな 春乱

七十を年若にして梅の客 栄山

鶴のすむ木の大ききや松の花 樹鶴

繰返しはやす七種薺かな 芝遊

松梅にはや戴きぬはつ日影 くに女

松梅を見添へて高し富士の山 亀楽

紅梅やすくれてよき八また蒼 暁山七十八齡

着衣始古稀な顔てハなかりけり 桃園(23・ウ)

人の日のはれや祝ひや梅匂ふ 竹夫

自 賀

枝ふりもありの侘なり藪の梅 梅青

諸君より祝詞をいた、きて

限りなき祝ひ言葉や御代の春

(24・オ)

東京日本橋区呉服町八番地

写松庵 竹 夫

文 音 所

鹿兒島県同市潮見町

潮見庵 梅 青(ウ)

勢ひの見ゆるや雉子の声の張 遠江 木潤
 七若菜積んでいやます匂ひかな 二河 玄山人
 是からか咲さかりなり山の花 尾張 素信 (19・才)
 露霜のいたミもしらす松の花
 末長し年のはしめはまた七日 其彭
 春永しまた七草ハきのふけふ 可翠
 花咲て尊し梅ハ老木ほと 中庸
 めてたさの声蓬萊にひ、きけり 伊勢 二道
 七草にはやしつ、けて梅の花 耕雨
 梅七分咲てうるはし千代の春 逸鯉 紀伊
 すら／＼と地に色届く柳かな 大坂 可交 (19・ウ)
 七節は見栄もゆかしかさり竹
 七種やいはひ離子て深ミとり
 すら／＼とのひてみとりの柳かな 泊水
 さく花の香も広かりて国に杖 西京 波鷗
 水おとのひさにひ、くや梅明り 近江 逸外
 来合せて祝ふもうれし謡初 備後 洗玉
 雨はれて梅のかをりの増りけり 長門 桐陰
 かきりなき春の栞りや梅の花 玄外
 となりても同し笑ひや春の宵 秋水 伯耆
 七種の摘はえ見ゆる天気かな 聴水 (20・才)

先稀に薫るや梅はいくとせも 卓左 阿波
 末なかきためしを芹の根引哉 抱節
 濃き色の椿や八千代手握りに 菖溪 伊予
 岩を根に幾千代も経ん岸の梅 魚青
 梅若菜齡きそふて匂ひけり 豊前 傘月
 近寄て見るほと梅の盛かな 桃之
 七草やされば豊なはやしうた 筑後 花鸚
 九重にかをりもと、け里の梅 肥前 一々
 白梅や流石老木も香の走り 文江 (20・ウ)
 八重梅も頓て開かん雪の里 籬雪
 八十島もちかく見えけり浦の梅 探真
 香も妙や七歩ひらきし浦の梅 秋外
 古木とも思へぬ梅のかをり哉 秋甫
 七度のゆきや香のます梅の花 松司
 八重梅の八重にかさなる匂かな 其翠
 老木ほと香に力あり梅の花 豊雪
 八重梅に古稀の翁を祝けり 竹子
 白梅のしろきハ老の姿かな 帰外 (21・才)
 しら梅のかをりそへたる翁かな 格外
 杖そへて枝おもしろし梅の花 霞峰
 かをりまでも古稀とやいはん梅の花 竹外

とし／＼に増るかをりや梅の花 桂圃
 香と共に其名も高し浦の梅 なつめ
 弥増に香の添ふ梅の主かな 梅圃
 青空の澄ていよ／＼梅白し 花江
 翁祝ふ福茶に梅の薫かな 柳月
 豊なるいろや匂ひや梅の花 香潤 (21・ウ)
 松竹の中にしろさよ梅の花 一甫
 梅さえる春かさりなき齡かな 杏雨 沖繩
 古稀色も姿もかへす松の花 松翠
 匂ひ来る潮の花や初日の出 元水
 古稀祝ふけふそ八千代の鏡餅 晚翠
 是からかさかりそ花は七分咲 雌堂
 松竹も青々として梅の花 加治木 玉葩
 鶴にとしあやかる古稀や千代の春 耕雲 (22・才)
 松はその齡を梅にゆつりけり 九花
 また先も幾代を経るそ松の花 水鏡
 根ちからの末たのもしや松と梅 春朗
 りつとして葉色も青し松の花 芦角 国府
 すこやかに匂ふや梅の中の梅 竹山

梅かをる家や主は福祿寿

武人

かさり竹節毎にこむる齡かな

泰室

門松やこれからさきも幾潜り

楓所(15ウ)

老木と八見えぬや梅の咲力

而考

咲替て香の広がるや朝の梅

暁雪

七坂を越して長閑や鶴の声

角々

日表や何処迄伸て梅の幹

伯志

百里とて一走りなり花に杖

李仙

福も稀齡もまれや梅の主

峰月

老木にハ稀な匂そ梅の花

谷水

下駄はいて杖ハかさりの梅見哉

糸静

人の日や稀な日和の空に鶴

芳谷

門かさり祝ふ心の揃ひけり

鷗洲

香走るや坂を越れハ梅屋敷

賞素

老振の見えて尊し国栖笛

左文

齡にハ際限もなし松の花

壯山

よろこひを鶴も謡ふや松の花

青扇

鉢の梅咲て目立や庭のむき

蘭舟

七くさや並ふ器も新らしき

塵外

年々に老て盛りのさくらかな

半水

庵なれや月雪花を筆はしめ

野牛(16ウ)

ことなきやせりの長根を老の春

友山

さして来る潮も若し春の海

春旭

老しらぬ眼に曇なし鏡餅

蓬秀

千代ふへき色をこめたる椿かな

月雫

梅咲て清きすまひとなりにけり

桂外

うるほひの見ゆる木草や春の風

速川

齒かためや祝ひの重も七つ組

吟風

稀な坂安々と越す梅見かな

月静

梅に鳥亦其うへに朝朗

素更

大空にあまるゆとりや春の月

墨雨

梅か香に庭木の眠りさましけり

晴雲

老振のかきなる枝や梅の花

甫立

春永に聞花鳥のたよりかな

瓢亭

まさそめる千代田の種や七ところ

希心

目に立やまれなるとしの老の春

松嶺

老てなほ匂の高し梅の花

四好

長閑さや磯には亀の楽遊ひ

水音

松山にのほるも長し日も永し

可才

老木ほと位のつきて梅の花

五荻

うつくしうかさねるとしや松の花

豊遊

寄す浪も年の花なり薩广潟

氷湖

船からも酒の薫るや浦の春

似水

清き香にあたりまはゆし梅の花

梅夫

果しなきなかめや春の薩广潟

洒落

香はしるやならへて青き七若菜

梅甫

千代を経た松のミとりや花の数

明京

坂越せハ何国までつゝく花に花

菊明

いにしへの稀な齡や老の春

龍湖

君か代やいく世をめくる松の花

而丘

何所迄も花の沙汰する日和かな

小仙

七つよむ数はめてたし宝舟

凍湖

世に稀な房生り梅の実入かな

鳳儀

くさくさの色をまとめて齋粥

対山

今年猶花数ふへて丘の梅

達古

千代かけて摘そめにけり七若菜

素洲

勢ひの見ゆるや老の筆はしめ

一境

乗初や手綱捌の花々し

鳩雨

世の春の花とやいはむ老の年

連水

花の世に九十九登りや花の人

静雄

梅咲てあたりまはゆき日さし哉

茗圃

さく梅に能うこそ来れ古稀の友

夏口

我見るも七むかしなり御代の花

雲鳳

めてたさはいふ道もなし福寿草

梅青

障子ひらいて初日いたく

文樹

遠乗の馬の嘶く春風に

逸朗

もの、奢りも処柄なり

二道

客を呼ふ手はつも月の頤をまち

酉水

秋の暑の照りつゝく空

夫明

干瓢の残りを垣にかけつらね

一艸

熊野参りをわすれては居ぬ

採花

見めかたち人にすぐれた娘ふり

寿兆

細いけふりの煙草商ひ

福司

雛鳥の糞りあるくも賑かに

箭浦

冬の椿も沢山にさく

松与

寒うても窓へさし込暮の月

学国

いつも机に寄かゝるくせ

汲古

小流のすむ水音を聞すまし

芳逕

二人並へハせまい道中

寸芳

曇り込匂ひのうちの花日和

尋香

盃こともむつまじき春

寿存

(13才)

九十九折まで見渡して花の雲

其鳳

こきませて千もと桜や千代の春

素水

咲ほこりかをり広げて梅の花

梅年

松竹につれてかをらん梅の春

青宜

香にたつや梅は老木と言れても

単年

ゆるくふみませ花の長堤

致遠

はま弓のあと先あまる服紗かな

素琴

春めくや空は次第に風

彦雄

初雪や松の盛りは老て後

正義

月も未だ七日ハ若し梅の花

桃鬼

も、とせの花も見ゆるや古稀の坂

涼松

遠く吹風にこなれて梅薫る

浪兄

齢とも言へき髭よ飾海老

覚斎

髪ゆかし梅か香放つ老姿

松江

末広き春そ扇の常磐山

雨静

年を経て其香の高し梅の花

未成

いつまでもともに遊はん花に鳥

清雅

潜りたきものよ長閑の七鳥居

機一

かをる梅老木ますくさかんなり

雀志

七草や千草もけふのめくみより

雪人

筆も世ににほへ机に梅のかけ

止篤

なくさみに百草つむや老ころ

竹杖

梅の門潜れハ伸る心かな

三華

若草やうしろ手にふむ七畑

笑波

雛鶴の機嫌よきなり松の花

風篁

古稀祝ふ年や輝くはつ日の出

桜鶴

不足なき年なり身なり梅の主

華芳

陽炎の袖まで立や小松原

閑蟬

一輪も流石に梅の薫かな

逸古

朝日さす潮にもあり春の色

冬月

若鮎や夜道かけての送り物

茶香

降かしな長くもかなと春の雨

溪石

夕栄の水に明るし梨の花

宝珠

老しらぬ老や柳の若みとり

柏堂

尚幾世限りはあらし松の花

無一

百千里杖ひきぬらん梅日和

巴山

庭桜広し梅か香桃林

夫蘭具

年経たる松に見栄る初日かな

碧海

永き日や山詠めても海見ても

一艸

老てこそ恋しさまされ梅柳

花朝

老の坂七ツ越ても日の永し

永機

限りなき齡持けり松の花

武蔵
雪衰

見上れば只一面の花盛

童

地虫のそく穴を出かゝる

夫

さそはれてからそれとしる経供養

青

名聞嫌ひ真のしたしみ

夫

焼杉の塀は目立す底いたり

童

弁利な事よ瀛車て何処へも

青

得心てわかれたあとのくよくくと

夫

肌身はなさぬ手わたしの文

童

雪の夜に孝行ものと誉られて

青

馬もあくねる二十三坂

夫

いつとなくはつきりとせし温泉の

童

交りふりは流石年寄

青

をりよしと月に軍の勝祝ひ

夫

萩も芒もせいくと咲

童

笑顔てハあれと淋しき後の雛

青

奇麗になつて広い町幅

夫

餌になれて手に乗さうな番ひ鳩

童

鈴なるおとの絶ぬ神前

青

七重八重老木の枝も花殖て

夫

潮の光りもまさる弥生

童

詫いうてたくも馳走の蚊やりかな

梅青

見るうちかわく庭の打水

竹夫

荷を配る小あけ仲間のとりくくに

青

もの、価安う銭まはりよき

夫

けふは早月真丸に成かゝり

青

棹美しう鴈わたるなり

夫

手の届くやうにも低き秋の山

青

客まつ床几並へおく茶屋

夫

兄弟か夫婦かしれぬ若盛

青

こゝろ遣ひのなくて有さう

夫

浅い川なれと冬たけ橋をかけ

青

もみちはら／＼ちり尽す月

夫

馬の子のおくれてハ又走り出し

青

城下にちかく調法な村

夫

別荘は本宅よりも奇麗にて

青

古稀の祝ひに集ひ合ふ顔

夫

時も時ころもなかはの花の中

青

飼はても絶す鶯の声

夫

旅好の連をすゝめる弥生尽

全

三里の灸は薬より利く

青

正直を基手かはりに売込て

夫

町のはやりに結なほす鬘

青

裏襟の色もひつたつ紺

夫

牡丹にまさる芍薬の花

青

いそかせる上段の間の畳替

夫

今度の住持又知識なり

青

一粒もおろそかにせず米搗て

夫

ならぬ堪忍するか堪忍

青

てる月のよこれものさへ隔なく

夫

末枯かゝる野芝居のあと

青

たちのみにして酔酺ろくの口あたり

夫

漕出すふねを呼戻し乗る

青

八剣の宮は長尾に続くやう

夫

千代経る松の枝栄つゝ

青

年毎に花新しう愛度て

夫

人の齢ものひる春風

青

月影しろく残る朝空

梅青

仮初に鹿聞までの庵建て

蓑

曬うた魚の塩辛きなり

青

とくくと流るゝ水のぬるむおと

蓑

彼岸のうちハ雨風もなし

青
(5ウ)

蟹蝨でありし意地らしう踏

栽

わやくとをとり崩れのあと先に

夫

呼たてらるゝ茶屋の下駄番

青

なくさみの占か当て雨の花

栽

礼拝講も都合よくすむ

夫
(6ウ)

永き日もおもしろけれハ暮安し

青

かしこき象の芸を覚て

夫

まけぬ気の年寄組の錢遣ひ

栽

あちらこちらへ建る四阿

青

美しい女子揃ひの湯治かけ

夫

暮ならへはつむ是も恋草

栽

いつ迄も果なき様に蟬の声

青

蹴裂の神のしけり尊き

夫

漸々と無腰に馴て気さんしに

栽
(7ウ)

瓢箪ひとつ大事からるゝ

青

との宿も月には向のよい表

夫

柳ちり出す空の青空

栽

はつ雁の行義乱さす鳴つれて

青

貢に事はか、ぬ山里

夫

賑やかに鯉ささむも楢明り

栽

馬士の仲間のあらしきもの言

青

並ふ木へまくしかけたる花ふ、き

夫

三人よつてむつましき春

栽
(7ウ)

小春日や曠々しくも鶴の声

梅青

冬のかすみの芦田這ふ程

竹童

遠くまで見ゆる二階の能出来て

竹夫

刃物もつ子をあふなからるゝ

青

月待に込合市をよけあゆみ

童

ちと吹風もうそ寒きなり

夫

草よりも梅から先へ末枯て

青
(8ウ)

寄進もあまる宮の繕ひ

童

ひんのよき帯も矢の字のむすひやう

夫

辞宜した時の笑窪愛らし

青

そたて、と言つる瓜もす、められ

童

夕月薄う影のす、しき

夫

絶間なくなかれて水の清らかに

青

困ふた米も搗へりのせぬ

童

むた遣ひしないか家の掟にて

夫

昔をしたふ人のゆかしき

青
(8ウ)

又来るも陽気尽しの厄払

栽

上野の鐘の冴て地を摺る

夫

出る雲もなくて淋しき宵の月

青

君かすむ園生の梅の初花八千とせをふ
ともかはらさらまし 森田重秋

長閑にも霞を汲て梅の花君か千とせを
祝ふけふ哉 鮫島高尚

君か経む千世のかさしと年毎に岡辺の
梅の花ハ咲らん 土持綱行

さかへ行軒端の梅の初花八千世経る君
かかさしなるらん 伊集院直二

八千代まで君かかさしと匂ふらん園生
に咲る梅の初花 中西秀彦

今より八千代をかさねて匂ふらん君
か軒端の梅の初花 深見有吉

根さすをや岡辺の松にかはすらん万代(3・ウ)
匂ふ梅の初花 東條伝之丞

うたけするその杯に匂けり君か園生の
梅のはつ花 神田昌実

さかへ行君か垣根の梅の花いく春風に
咲匂ふらん 東郷重昌

瑞枝さす梅の花笠君はきてうたひつ舞
つ万代や経ん 瀬川 礫

木枯に研すましたる梅か枝に君か千と

せの春はやとらん 新納軍太郎

きのふけふ君か軒端に咲梅八千世のさ
か行かさしなるらん 中島利安

梅の花としふることに若かへりちよの
香深き君か宿哉 種田しげ子

とし毎に積る雪間にゑみそめていく春
匂ふ軒の梅か香 種田み知子

さく梅の花の中より千世ふへき君か齡
も匂ひけるかな 野村彦二

和かの浦なきさに遊ふ田鶴をさへ君か
齡を千代に鳴らん 薩摩郡入来村

君か代八千世もこかれる呉竹の齡なか
らもさかへけるかな 古川怒勇

いく千代もみとりかはらす栄ゆらん君
か友なる岡のへの松 宮里与八

若かへる春を迎て幾千代も経るへき君
とかねてミへけり 藤崎伊三太

万代もいやさかゆらん亀の尾のなかき
を君か齡にハして 西田英世

庭の面の松もけふより若かへり君か千

とせの友となるらん

伊作郡大村 藤本曇暉

けふより八君かよはひも若かへり千代
万世とさかへ行らん 時吉正道

岡へなる松のミとりも色そひて君か千
とせをかそへ行らん 蒲生てい子

おもひきやかゝる伏家の梅か枝に匂ふ
言葉の花咲んとハ 岡部宝昌

名月やゆるして通す夜の閑 故逸 湊

遠退く鶴の良寒き声 梅青

青柿の色つく俣に渋ぬけて 桃裁

末の悴(倅)も人になりけり 湊

屠蘇の香の格子の外に吹廻し 青

初商ひに家の繁昌 裁

動かねは折れさうにあり露の萩 山簑

無量集

〔印〕

無量寿

(翁の絵)

七十七翁

蔬水幹

〔推原
国幹〕

〔主入公〕

雅客満堂祝寿居 詩歌妙曲轉鮮新 白眉

老叟開眉笑 兩手指頭〔オ〕七領春

賀

梅青翁古稀

七十四齡 中邨如是

(太 式指)

〔ウ〕

賀梅青雅翁七十寿

荻野拙叟

得意春風栽錦衣 太平氣象及椿閑年当七

十字畫眉達笑向兒孫解古稀

古稀賀言

〔薩摩郡人
米村獲麟〕 西田英正

平日散財々却加一 生功績德添華無窮福

祿餘慶在賀宴今開積善家

賀宴今開積善家 歡声忽起錦江涯風流別

有最生術餐得蓬萊島外霞

〔一・オ〕

餐得蓬萊島外霞 風流寧織在商家樓中銀

燭明於月床上紅氎美似花

床上紅氎美似花 千金一笑買豪奢功高七

十年間業平日散財々却加

梅青翁古稀の賀に寄梅祝といふ

事を

梅の花咲て匂へる中垣に君か千とせの

かけも見えつ〔るか〕

〔鹿兒島七十九齡〕

松本時直

錦江の堤長閑に咲梅八千代の春迄香

は残るらん

〔七十七齡〕

椎原国幹

〔一・ウ〕

千代八千代しめたる宿の梅花香をかく

君ハ老すや有らん

〔七十三齡〕 満尾利真

いた、きの雪もけぬへし 鶯の梅の花笠

君にかさなむ 〔七十三齡〕 山口利雄

鶯の梅の花かさ玉の緒のなかけ齡ハ君

そしめたる 木脇祐治

実を結ふ岡への梅の深ミとりいく百と

せもさかへ行らん 久保之福

岡への松の千とせをおもふにハまた

なくそちハ稚なりけり 大滝 新

松竹梅といふ心をことほきて

枝かはす松と竹との万世を色に見せて

も匂ふ梅かな 〔從六位〕 福崎季連

うら／＼と霞む岡辺の梅か香は千代経

ん君か垣ね也けり 川畑□□

雪霜をしのき／＼て咲梅の千代の匂は

君そしめたる 諏訪広兼

鶴亀の遊ふみきりの松竹に千代を争ふ

梅咲にけり 指宿近春

梅か香を袖につゝみてはる／＼と帰る

千とせの春をこそまで 鈴木基次□

年毎に色香まされる梅の花君か千とせ

のかさしなるらん 町田実樹

者の梅青は言うまでもなく、入集者の椎原国幹・満尾利真・山口利雄等のことが明らかになれば、その享年から成立年時は確定出来よう。なお、潮見庵梅青は旧派の俳諧宗匠と思われるけれど、通称その他全く不明である。逸淵と一座した連句を掲げていることから見ると、文久元年七十二歳で没した江戸の宗匠逸淵の指導を受けたことのある、この流派の宗匠であろうか。いずれ後考を期したい。終りに翻刻をお許し下された中西啓氏に厚くお礼を申し上げる。

(大内 初夫)

翻刻

凡例

- (1) 翻刻の要領は、前記の凡例に従う。
- (2) 丁数は原本各丁末尾に刻してあるが、ここでは(オ)(ウ)を付した。但し、原本誤刻か脱丁か不明であるが「二」を逸しているので、丁数の数字はそのままとした。
- (3) 虫食い・難読文字は□とした。



梅青

『無量集』

— 解 説 —

○『無量集』

半紙本・刊一冊（長崎市 中西 啓氏蔵）

明治時代の鹿兒島の俳句界について『鹿兒島市史』（第二卷）には「俳諧連歌は薩摩藩武士の間に一六世紀以来、盛んに行なわれた（上井寛兼日記）。このような伝統から俳句も明治時代すでに同好者の間で、句会などが開かれ、本格的な発展期に入った」と記されている。しかしそこに、そうした活動を窺わせる一人の作家も一冊の集もあげられているわけではない。後述のことから見ても、「本格的発展期云々」とするのはむしろ後代からの予測による大胆な記述のようで、鹿兒島明治俳壇の究明を志す者として、およそ学問的ならぬ発言と言わざるを得ない。実は『海紅豆』（第2集、昭和43年刊）に「中央から遠い鹿兒島俳壇では子規新風の波及はさらに遅れて、明治の末期になったのではないかと思われる。幕末からここに至るまで、ほとんど明治全期に亘る旧派の状態、さらにこれがいわゆる子規の新派に移行する状況については、鹿兒島県俳壇史として全く手がつ

いていないのではないかと思われる。これは今後の興味ある研究課題というべきであろう」と、中尾良也氏が述べておられるのが、まさしく実情をよく認識した発言なのである。要するに明治時代の地元俳壇については、旧派については勿論のこと、子規一派の新派が波及する頃のことでも、現在なお一切が未調査で、不明のままに放置されているのである。従って今後の課題は、この時代の俳句資料の掘り起こしにかかるべきで、丹念に資料を発掘し収集してゆくことが必要であるし、そうした地道な作業を積み重ねることによって、明治期の鹿兒島俳壇の実体が初めて明らかになっていくことであろう。

ここに翻刻する『無量集』は、明治の鹿兒島俳人の手になる旧派の俳書である。江戸期の俳書と体裁は同じで、木版本・袋綴じ。表紙は白地に薄紅色の模様が入り、中央から下方に梅花の絵が書かれている。題簽は中央で無辺。柱刻はない。内容は、鹿兒島市潮見町居住の潮見庵梅青の古稀の賀集であり、県内の詩人・歌人の漢詩・和歌を巻頭に収め、ついで梅青が他の俳人と興行した連句数巻に、諸家の賀句百八十余吟を並べている。出句者は関東から東北まで殆ど全国に及んでおり、恐らく巻末に文音所として記されている東京日本橋区の写松庵竹夫による集句の協力があつたのであろう。

ところで、本集の成立年時は不明である。集の体裁などから見て明治十年代前後のものであろうか。連句の付句に「ママ弁利な事よ瀛車で何処へも」とあり、汽車が走り始めて間もない頃の世相が詠まれている。今後、編

二百拾点

百三十
十
七十

同
風立

二百二拾点

六十
百五十
十

同
三猿

二百三拾五点

百八十
二十五
三十

カノヤ
秋好

二百四拾点

百五十
八十
十

大根占
山鳩
(49才)

二百五拾点

七十
百七十
十

カノヤ
三猿

二百五拾五点

百三十
百十
十五

大根占
山鳩

二百六拾五点

八十
五
百八十

クシラ
未見

初春鳥
三猿雅丈

清書堂

(ウ)

U	花ニさびしき留守の春	全	大根占	A	枯野の床やきりくす	全	ED	禁酒に酔の興かさめ	全
HG	飴も泪や夜泣石	全	大根占	B	月と二人で三井の鐘	全	IG	午 <small>牛</small> の寝跡 <small>牛</small> や萩の花	志訓
W	露もはかなき苔の下	全	吟月	C	さとりに開ヶぬ謎の花	全	A	むくらハ花のま、子立テ	全
A	南無阿弥爺 <small>ヲミト</small> やか、の顔	全	同	A	火鉢に浮名かくや姫	全	A	鳴立沢の夫マの旅	同
K	乳 <small>マ</small> に涙を絞りませ	秋好	同	K	秋の声きく旅の雨	全	R	なく子の門に鬼の声	牛笛
U	鳳凰膝に二位の尼	全	大根占	U	春雨畳む花の幕	全	F	昼の蚊を追ふ去れ妻	未見
A	ねくらを鶏の鳴わかれ	秋好	大根占	PD	名残を縫ひし旅湯かた	全	SQ	雨に羊の革羽織	全
W	勘気身に染ム秋の風	全	同	F A	萩にミたる、留主の暮	全	PD	蝶の名残や釣干菜	全
A	浮名にしほむ合歡 <small>ネム</small> の花	山鳩	同	A	洒く泪や湯女 <small>ユナ</small> が袖	全	A	菊に霜夜の嫁異見	大根占
A	自身申の子持月	全	同	C	乳房をしぼる去られ妻	全	A	旅の鳥や雪の暮	離博
R	趣向も曇る隠岐の月	全	同	U	伽羅の香ぬけし茶せん髪	全	A	在附ぬ気や旅の空	全
M	琴の音さへぬ嵯峨の月	全	同	C	談儀 <small>ママ</small> に姥ハ時雨塚	全	A	雨のふり込む阿弥陀堂	全
A	旅寐に雨の憂 <small>キ</small> を着セ	全	同	C	鳴 <small>ママ</small> ッ子の声を去られ妻	全	C	行脚 <small>キ</small> 笠抜く塚の前	全
C	蒲の捨子や昼 <small>ヒル</small> 蛩	全	同	A	うなつく花の思ひ瘦	全	E	折鑑 <small>ママ</small> の夜や月曇	全
F	異見 <small>ヒル</small> きく夜の東風曇	全	同	ZN	塚のゆかりや女郎花	全	W	田蓑の鷺にゆふしくれ	全
B	きぬくの夜に月老人	全	同	A	かびたん国をおもふ白	全	ED	血持ハ閨 <small>ネム</small> の合歡 <small>ネム</small> のはな	全
C	魂棚洗ふ萩の露	全	大根占	U	かた身計や須 <small>フ</small> 廣の浦	全	ED	日に呵 <small>ママ</small> かられし花あやめ	全
A	雪ふる里の鐘の声	全	白人	C	結ひわけもなき乱髪	全	A	寵もくち葉や日影はな	全
LD	何いふ白の塚の前	全	同	C	異見 <small>ママ</small> に濡る、妹背川	全	PD	娘 <small>コ</small> を売りし夜八月も見す	同
W	俯見へし盆の月	全	同	A	桜に負れて戻り加籠	全	A	関の清水にかけ濁り	風立
B	月の関問ふ下女が白	全	同	A	日 <small>ママ</small> に植木の夏痛	全	A	歌読ぬ公家月障り	全

B わんぱくや留主の間を扱金魚鉢 全

C 行暮て宿ルに花の陰もなし 全

C 短夜に長ひ異見や片輪聲 全 (30オ)

B 早苗から出穂まで喰る、放レ馬 酒泉 全 (30オ)

B 境ヒせる隣がわけの広屋敷 全

A 山桜から踏れける麦畑ヶ 全

A 我が恥を人の歌ひし世の浮名 松風 全

A 鶉さへ見せん小萩に鹿の跡 大サキ 全 (ウ)

C 散る名とは聞せぬ花の借り屋敷 雲風 全

B 仇惚の悟気に今の寡住ミ 野月 全

C 夜鷹ゆへ比翼の中の羽を蹴られ 全

K 契り置し連理の枝の月障り 全

A 夜は長し衣は薄し一人寐の 香松 全 (31オ)

C 蓑干の日和も見へぬ入梅の内 全

A 花の比は夢の浮名や六十囀 全

ED 長留主の枕に通ふ姫ノ君 全

A 傘ハ持たす心に雨を持たながら 芦角 全 (ウ)

R 見る人が首筋見する辻芝居 全 (32オ)

打しほれ (ウ)

A 腹に露持ッ姫が萩 全

A 柳のごとく駒の塚 全

C 医の智に掛た薬鍋 全

A 燕メも悔む柳墓 全

PD 曇ル訳あり盆の月 全

A 母もあハれむ児の滝 全

C 何も娘がいわた帯 清書 全

K 昔のかほる君が袖 全

U 又明ケて見る小袖櫃 全

B 異見に胆の消へ火つぽ 全 (ウ)

C 芙蓉も雨をほしけ也 全

A 病ム夜ハほそし虫の声 全

C 山も眠し庵の雨 全

K 文にも露や隠岐の国 全

A 繩になりたり水になり 全

B 立腹流す小野の滝 全

A 来ぬ〇重る袖の露 全

C 疵持つ足の桜の留守 全

K さられて曇る夜半の月 全

A 早りすかしたる留主の菊 全

W 袖に時雨を求め墓 全 (ウ)

U 祇王も嵯峨の秋寒し 全

A 乳房の曇ル月の眉 全

A 虎が其夜の涙雨 全

C 逢ふ夜の鹿や下紅葉 全 (35オ)

K 痛歯になく虫の声 全

B 霜夜を悔ム菊の白 松風 全

A 耳に訳ある鐘の音 全

A 鳥部野に咲く尾花髪 全

U 旅の哀れを聞く磁 全

C 産メハ匍匐ニタ子嶋 山住 全 (ウ)

F 来ぬ夜ハ寒し一ト人リ部や 全

A 箸の折れたる孝行子 全

A 高麗帰朝をまつら姫 全

B 仏も嵯峨の踊り留主 全

K 櫛の齒折れし母心 全

W 伯牙も後に一人りごと 全

M 医に白あげぬ脉の疵 全

ZN 乳にた、かれぬ夜半の門 棹舟 全

A	B	B	YG	A	A	B	A	A	M	F	C	A	A	ED	R	HG	C	B	ED	B
吾妻を猿に鏡の二ッ面	尻餅を突時下駄の齒も弱シ	姑メの好程嫁にあき茄子	挑灯に蹴上の水やぬかり道	狐とハ読し八声も鶏の跡	口ゆへに我誤りや去られ妻	さかれたる文ハ浮名の放駒	そり返す白木の弓に絃はらん	乗打や小サ刀も見鏽られ	指を蹴た石ものいわぬ闇の道	蹴つまつく殺生石や闇の道	口水の果を折られし梅屋敷	雨毎に人のさゝゆる池のこひ	小僧いかに拂子の釘に掛かもし	焼れてもふすめられても朝辰	枝折て指をさゝれし花の蜂	生爪ハ我あやまりと岩つゝし	鶯の子飼に猫のさがり藤	間夫有て家内をゆるする京の塚	壁越シの浮名に咽唐からし	妻戸口鳴ル子の音や旅枕
全 (ウ)	全	全	未見	全 (25オ)	全	全	全	全	全	全 (ウ)	全	全	全	全	全	全	全	全	全	水昌 (ウ)
A	A	C	C	A	M	A	A	XN	BD	B	A	C	K	U	W	B	A	A	C	U
所望せし生ヶ杉といふ馬が見へ	蚊に負て澄て鳴れぬ郭公	二度の櫛さすがハ武士と誉られん	誰か下駄の跡しら雪や部屋庭	似せ筆の墨色古キ人ハ誰ソ	見る時の月とハ違ふ□の秋	酔といへハ不生女むする子持鮎	石ニ通ル矢も有ル物を恋ノ関	面白キ礎ニ交ルきねの音	昼貞に夢やふらるゝ垣隣	すむ月に皆闇ミ言の葉ももるゝ	いひ掛の果やしまらぬ髪のかせ	寐にくさニ邪魔な隣の笛の曲	我が夫ニ媚る西施か白よ花	絵襖の奥ハ比翼のさゝめ言	ゆふ髪のもつれに桜の供はつれ	宵からに松尾時雨や夜の君	宵闇の間を盗まれし梨子礫	来ルくも二人リ蔭有寝屋の月	初客の鼻ニからしの膳崩シ	其時の言訳曇ル月の首尾
同 鬼象 (ウ)	同 女童 (ウ)	全	全	全	全 (27オ)	全	全	全	全	全	同 風立 (ウ)	全	全	全	全	全	全	全	全	大根占 離博
A	A	A	M	C	F	BD	PD	LD	A	C	A	B	A	M	F	C	C	A	C	R
空言を又幾夕露に濡レにけり	老ハうし髪深草ハ有なから	花垣や俄に風の責大鼓	約束ハ虚空へ飛で明ヶ鳥	情なひ女あるしや佐野の暮	蛙鳴ク黄昏時や生マ薪	早咲の梅を鳥に踏折られ	待宵の鶏ハものかハ明のかね	来へき夜の蜘蛛の知らせもなかりけり	蝶にさへ見せぬ牡丹の獅子狂ヒ	別冊に月の隈見る旅日記	洗濯の垢ある庫裏や旦那寺	ねむたさのうつゝに残ル蠅の音	尻ひへて鍋ぬくもらぬ生マ松葉	約束も人の時雨に流れけり	珍客にけむたひ顔や生マ薪	あき風に吹かれて闇の肌寒サ	思ふ俣ならの都の桜の縁	眼鏡も曇ル今宵の月の宿	留主に来た文や女房の不審紙	誘われて負にきたのゝさいの梅
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	同 翫月
	大始良 霞松 (ウ)			同 雲風	同 香松	大サキ 耳鳥 (29オ)	シブシ 全 (29オ)		シブシ 全			同 掉舟 (ウ)				カノヤ 柳好 (28オ)				

A	R	A	A	HG	B	SQ	ED	A	B	B	B	U	B	C	A	A	B	C	F	B
夜遊ひの露や勤にしミが付キ	両脇に汲メバ濁りてくるま井戸	乗打や雷門に目が光り	紅葉貞したる姑にあきの風	友を待ッ其首長し鶴見橋	蛇汁に追ハるゝ木曾の旅蛙	傾城が寒ひ白する鬢の雪	佛さへものいひ神に鼻を突	錦木に邪魔を入齒の影法師	いひ掛の訳から蒼む袋角	衣笠や風に消ゆく夏の雪	人口をふさきとゝめん世の浮名	咲く花を誰か折かけし梅の枝	姫が顔夜々に鳥鶏の羽ね言葉	其母の目に光りある蛍狩	時の間に卒都婆小町や魚の酔	不縁ぢやと言へと異見の聞にくさ	梅とてハ見れ共指が届キ兼	讚掛る文に曇りし月の白	鶯の子飼に猫の下り藤	旅跡の閨の枕にしミが付キ
カノヤ 松風	全 (19オ)	全	全	全	全	カノヤ三猿 全 (ウ)	全 (ウ)	全	全	同所 川童	同所 三水 大根占 (18オ)	同書 留鳥 三水 大根占 (18オ)	同書 留鳥	全	大根占 山鳩	全	全 (ウ)	全	全	同所 清書
LD	ED	B	A	M	B	F	A	M	A	A	A	A	A	IQ	C	C	M	B	A	A
誓文の墨付わるひ男郎花	御帳凡となつて娘か地獄櫃	かならずと繋ひてこんな捨小舟	子なし辻卒土婆流しに隙を遣り	飯苞の行衛ハ猿の砂羅双樹	待ちくゞて只有明の月寒し	一たひハ河津鳴せん曾我二人	横に押す車ハ酒の油にて	月見戻り戸を叩ケ共免寐の	宵暗の約ニ鶉飼のしたゝるき	糸口のもつれを肝にくられつゝ	誤まつた鍋に姑の生マたぎり	長ひ夜に短ひ膽や姫異見	家さびて肝の切れざる賣リ刀	絵ハ画ケと舟にハのセぬ一人僧	蚊屋を出て又障子有り異見の夜	一筋を聞入レもなき針の耳	淀ム程猶泥ロ噓き水の論	いひ掛て櫛目もづるゝ尾花髪	乗打やあたかの関を追ひ遊シ	かくし度キ浮名ハ袖に包まれず
同 山鳩	同 全	大根占 秋好 (21オ)	全	同 秋好	全	全	大根占 吟月 (ウ)	全	全	同所 掉舟	全	カノヤ 初人 (20オ)	全	同所 三猿	全	全	カノヤ 山住 (ウ)	全	全	全
A	A	M	C	B	XN	K	A	M	C	C	A	A	B	ED	A	ON	PD	K	A	IG
呼ハれ来テ阿蘭陀百合の花も見ず	ふみちらす仇名に誰や花籬	句のたねも野分クにゆるゝ芭蕉の葉	落したる文に浮名を拾ハるゝ	庭木とハものないハセぬ梅の枝	稲喰ひし曙悪クし猪の跡	春雨に葉計り残ル山桜	琴の爪終にハ仇と業平の	踏折し牡丹の花に獅子狂ひ	きて見れとけふ細布や縫ひ逢ハず	逢坂と思ひし人に粟津道	誰が袖を留主の桜に入ほぐる	命より折られし桜のをしけ也	夜を積メと君に阿波手の森の雪	焚付のわるひ姑や青松葉	木兔の文を鳥に読れけり	初雪に下駄の齒形の底を付	賤の女に恥を讀れし歌の端	燈もほそるまで来ぬ君か儼	凧に巫山の夕部おもひそへ	国替や茶に汲む水も泥くさし
全	大根占 未山	全	全 (23オ)	全	全	同 里蝶	全	全 (ウ)	全	全	全	全	大根占 白人 (22オ)	全	全	全	全	全 (ウ)	全	全

- A 掛テ来る己か古巢の時鳥 全
- B 兄弟子を寿く奈良の東大寺 同
カノヤ 女意 (ウ)
- W 出て会し花のもとなる和歌ノ友 同
鬼象
- W 国を去て三巴遠ふきのはなの友 同
翫月
- U 月の友廻り逢ふたる須廣の旅 全
- J 秋ことに噂をきくの友に逢ひ 全
- HG 遠方の友鶴にをふ和歌の浦 全
カノヤ (12オ)
- C 乗合に名乗れば本の風雅同士 柳好
- C ふし持たぬ友の水鶏や竹格子 全
- A 疑ひの封を切て飛ぶノ文 全
- M 親の気もひらく便りやはな扇 全
同
- F 花咲てもとの同者に大原路 掉舟 (ウ)
- K 舟の酔さめて涼しき庵の月 全
- A 春に來し親の堅田や御所の鷹 全
シブシ 懐月
- B 嗟峨の柿訪へハ眉目の節月花 全
節月花とハ短才の撰者
しらすしかし雪月花□□ニ
而ハなき歎
- W 息災の月雪薫るノ使者 全
シブシ 耳鳥 (13オ)
- A 返札に淀ニは見へぬ加茂の水 全
- U 別れ路のむかしを語ル梅桜 大崎 香松
- BD 親里に笑顔くばりし旅土産 同 雲風
- M 夏疲もせん祖の前に旅戻り 全
- F 身請して親の戸口を明ケの春 全
大始良 霞松 (ウ)
- ED 雲水や母も心の唐錦 霞松
- W 廻り逢し影はゆかりの月の友 全
- DK 旅なから匂る昔の花の宿 全
- A 二タ親の影ハわかさに江戸の左右 全
- B 太ク成り帰るに母も目か少り 全
カノヤ (14オ)
- A 久々に逢しも友の江戸下り 酒泉
- B 京の伯母出逢ふ笑白の茶屋懸り 全
- B 碁の渡り友に相図をかけの板 全
同
- A 初旅に心とけ行ク母の文 松風
- B 妹に遣る文ハはれノ須廣の旅 全
大崎 (ウ)
- A 待兼し旅の勞れもなき笑ひ 雲風
- F 難舟の噂に變ル旅戻り 同 野月
- A 梯をまいらせ候の仮名ニ書 全
- A 江戸沙汰を舟から舟の明シ灘 同 香松 (15オ)
- C 厂か来て燕も国の左右を問ひ 全
- B 荷印ニ出向ふ畠主の花紅葉 全
- A 其君に忠の操か尋付キ 全
- A 故郷に鸚鵡返しや宮仕 全
カノヤ
- A 今の世や金戈鉄馬の声もせず 荻角
- C けふも又日和よしの、花戻り 全
(ウ)
- はら の 事 空白 (16オ)
- たつ
- ぶ男や難波の娘があきのつき 清書
カノヤ (ウ)
- ON 悟り草遣れハ螢と成りにけり 全
- F 燃へずして膽の焦る、生マ薪 全
- C りん気をハ入れた袋や肝の臟 全
カノヤ
- B 白の波夜舟が嫌ふ袖が浦 全
カノヤ 三猿 (17オ)
- CD 泉水を堀れハ子共の飛び蛙 全
カノヤ 三猿 (17オ)
飛ぶ蛙と有るべし

C	金子袋まで故郷に帯をとき	全	CD	金札の夜が明 ^ケ てから戻り橋	全
U	花に來ぬ春のうらミを書て遣る	全	U	二親に旅から崎の葉を一ツ	大根占 未山
A	月雪の哥摺れをとく草鞋の緒	全 <small>(ウ)</small>	ON	故里に読返 ^シ たり和哥の浦	全
W	呉れし子ハ千両そよく風の音	全	K	迷ひ子に二度の産 ^ブ 湯をかけにけり	同 水昌 <small>(ウ)</small>
ZN	春立、ハ花見に來よと志賀の姉	全	K	京肌に馴し噂や母の笑 ^ミ	全
A	言伝の匂ひを送る梅の聲	全	M	旅の子ハ真綿にする、都伝	全
GN	早蕨に花の言葉を送り遣り	全	B	留主の世話妻か夫 ^ト の文に解	カノヤ 松風
ED	大臣より千賀の汐味詠 ^ミ 送り	大根占 白人 <small>(6・ウ)</small>	A	宿下りや春立けふの親子草	クシラ 蔵六
A	板倉の跡諸司代の釘占り	全	C	追分や山田下向の迎ひ駕籠	同 全 <small>(ウ)</small>
H	故里の便りを曲輪に菊の花	全	F	長旅の留主もゆるかす戻り橋	クシラ 黄雀 <small>(8・ウ)</small>
			無事を聞てよろこぶといふ題 に曲輪に菊の花と留りてハ 別字同意と申てきらふ事也		
XN	佛も河原の院や月の友	全	B	御白見てと ^ハ 鳥もかわひらし	全
GN	御帰朝や高麗縁 ^{ヘリ} の花筵	全	ED	親里の友にあひその旅土産 ^{ミヤゲ}	同 老楽
C	吹返す屏風か浦を間ぎり萩 ^ケ	全 <small>(ウ)</small>	A	打絶し旅の知音に富士見茶や	同 全
J	親里に參らせ候が見事にて	全	A	打なから投入藤の置形見	同 三山 <small>(ウ)</small>
R	商ひに身の入舟や難波口	同 里蝶	C	娘姑ともに産後の月涼し	同 三甫
PD	姑 ^メ の嵐に散らぬ娘が萩	全	M	墨色の替らん親のしらせ状	同 志訓
C	來ル秋に風の噂もなかりけり	全 <small>(7・ウ)</small>	XN	送られてまたおくりけり粽五把	全
W	所司代が能ふて町留開きたり	全	B	初孫の開 ^キ 手を見る母じゃ人	同 全
			ED	黒色の笑 ^ミ を羽た、く旅の鴈	同 牛笛 <small>(9・ウ)</small>
M	珍しひ白は十年一 ^ト 昔	全	A	立秋や古巢に羽打 ^リ の文	全
BD	鷹野から翹れて御成や乳母か宿	大根占 離博	LD	日外の寐もの語りや月の宿	全
ED	仲磨の母に届 ^キ し唐錦	全	C	親里に行野、春の花土産	全
			古けれとも		
C	息才と計り京から初便り	全	A	旅の世話 ^ト も手紙の墨 ^ニ ちり	カノヤ 醉猫 <small>(10・ウ)</small>
U	思ひよらぬ宵やゆかりの月の客	同 風立 <small>(ウ)</small>	A	御噂に悪ひ鳥がをもしろさ	全
M	賀祝 ^ニ 鯛も緒ふる若狭客	全	H	旅戻り皆安楽と菊の酒	全
LD	桜守りも去年の短冊出して見せ	全	此菊も前に同し		
C	花咲 ^ケ ハ今年も匂ふ初瀬寺	全	A	廻りあひて晴れ行雲や曲輪の月	全
ZN	桜ニ來て又紅葉 ^ニ も嵯峨の茶屋	全	PD	摺れて來 ^ル 難波の風や伊勢の萩	全 <small>(11・ウ)</small>
K	草臥し頃ゆかり有 ^ル 宿の藤	全	A	契りあひし桃 ^ニ 又花の緑	全
PD	摺れて來 ^ル 難波の風や伊勢の萩	全 <small>(11・ウ)</small>	A	廻りあひて晴れ行雲や曲輪の月	全

〔辰初春大隅連雜俳集〕

互に

無事を

聞て

悦

あしからぬ難波の聲が文伝

文の伝テよろし

カノヤ
清書

廻り逢ふ僧ハむかしの智音院

全

旅湯形迫片糸が縫ふて遣り

全

子に送ル母が手品のむすびのし

同所
全

御使がきたの、姉の初便り

同所
カノヤ
全

風形りや柳の里に馴れ娘

馴れ燕とあらバ

三猿
(1・オ)

姑メハ去年の臭凹を出して見せ

同所
清書

初陣や我ハ甲の緒もメズ

全

安全の文ハ姉じやの妹じやの

全

参詣の舟ハ利生の晴日和

全

対面の絶て久しき隠居同士

全
(ウ)

曇りなき文の明りや月の旅

大根占
山鳩

御乳に咲花に手入る、筆のませ

同所
全

九重の匂ひを贈る八重桜

同
留鳥

ふしなきや竹の都の花の列

三水

無事の無の字

摘て遣る若菜知らする垣隣

大根占
同
三水

雪折のきれも解逢ふ桜の縁

川童

二々親の鼻さへひかぬ自筆状

全

凱陣の噂に妻も手柄顔

全

言伝に花を咲せし京の伯母

志賀の伯母と有り度

全
(ウ)

千代くといふや雀が浦の聲

カノヤ
巻首
三猿

疵持タぬ子ハ玉簾の内勤メ

全

旅戻り寐物語りの夜もすがら

全

我親の堅田に厂的文伝へ

是も文の伝よろし

全

兄弟の笑凹くらぶる旅戻り

全

曇らざる文や笑白の十寸鏡

全
(3・オ)

引留て昔を語ル弓の友

カノヤ
松風

秋来ルと堅田の聲か厂的文

全

墨色に母の笑白の面白サ

全

留主の世話妻ハ硯の水に解ケ

全
(ウ)

一ト里ハ坊主時花らぬ瘡瘡の春

カノヤ
山住

年根のミ昔に替ル旅の母

全

年斗と有り度

玉の緒の強き加賀そや戻り舟

全

疫病の飢饉にあひし一ケ国

同所
三猿

君が代ハ枝をならさぬ花の春

全
(4・オ)

ゆかり皆医者とハ不和の脊同士

カノヤ
初入

雨でなし吉野の里ハ花曇り

全

桃翁の誠も三人リ二度の春

同
掉舟

雪問わぬ聲の恨ミも花に解ケ

全

錦着て我築山の春にあひ

全
(ウ)

ふし持たで帰る姿や竹の杖

大根占
吟月

由良の戸の行衛を見する蝦夷の文

全

二親に櫂の花の一樹にて

全

水形りにすむや和睦の花菖蒲

同
秋好

長旅の草臥落す吾妻垢

全
(5・オ)

乗合のわかれし跡も浪立す

大根占
秋好

夢に見し柳に夫マの燕

同
全

在附もよしの、里の花娘

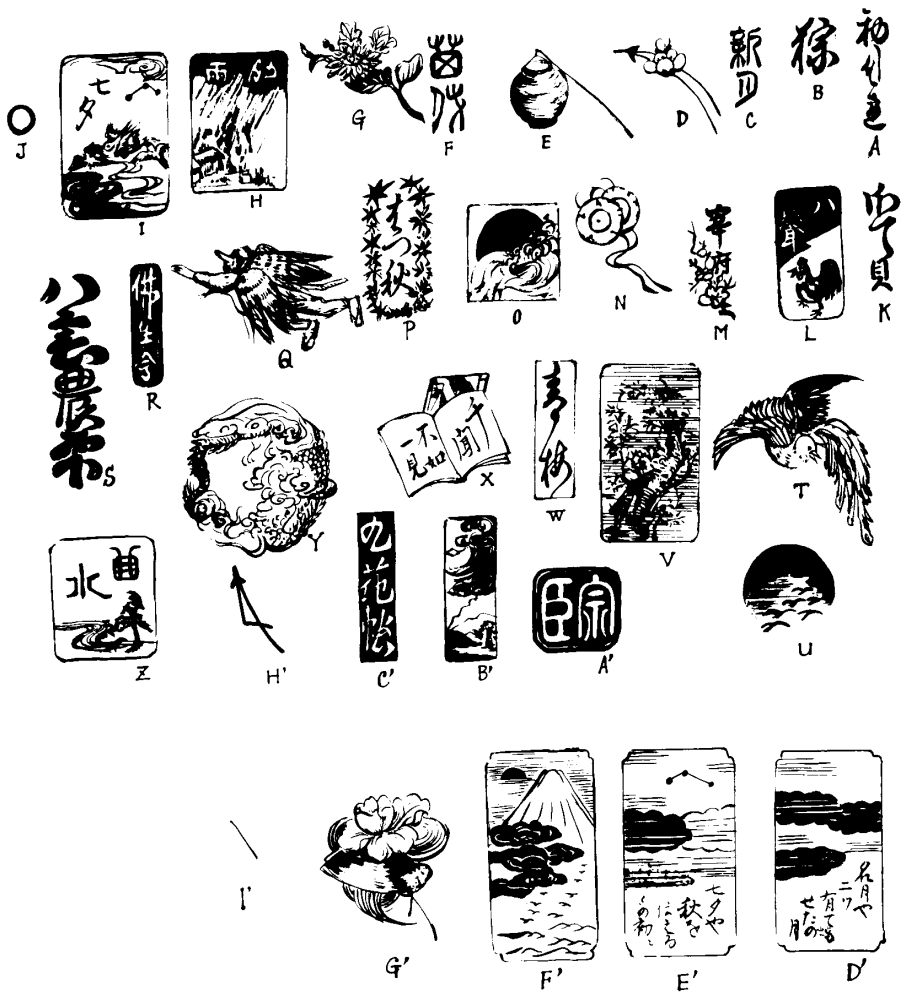
同
山鳩

翻刻

凡例

本文は、原文を忠実に翻刻することを旨としたが、便宜左の要領に従った。

- (1) 文字はおおむね現行通用のものによった。しかし当時慣用の嶋・白・艸・鴈・尸・躰・哥・姫・迤・十など、若干の異体字・略字体を用いたものもある。
- (2) 清濁・仮名遣いは原本通りである。
- (3) あきらかに誤りと思われる部分には(ママ)、宛字には()内に正しい文字を傍記した。
- (4) 本文の左に記されている原文ルビは、すべて右に移して統一した。
- (5) 丁付は(1・オ)・(ウ)のように略記した。
- (6) 判読困難な文字は□とした。
- (7) 鈎点・印点については、下に示すように模写図を作り、ABC……の記号で句の上に記した。鈎点Pは墨、他の印点はすべて朱である。



るから文政三、天保三、弘化元、安政元の何れかの年に書かれしものと思はれる」(原文のまま掲出)

右の文章には若干の誤解もあるようであるが、この雑俳集の主要出句者である鹿屋の三猿のことが種々あきらかにされていて有難い。それから本集出句者の住地は、鹿屋・大根占・志布志・串良・大崎・大始良等の地方、つまり大隅地方に限られていて、この点、従来紹介して来た雑俳集と少し異なるようである。

本集の成立年時は、「辰初春」のみではそれが何年に該当するか、容易に決定し難い。巻末の得点表は、一番上が個人別の総得点、次が各題別の得点である。同一人が二度出るのは、前稿にも記したごとく鈴木勝忠教授によると、二株分出句したものらしい。恐らく三猿が主催者で、清書堂がこれを取りまとめて清記し、点者(宗匠)の点印を求めて三猿に送付したものが本集であろう。そして、本集に引点した宗匠は、巻末によると吸風と見られる。用いられている点印は別掲の表のごとく、大方円さままでである。終りに鹿屋公民館並びに田中道雄氏に謝意を表する次第である。

(大内初夫)

『〔辰初春大隅連雜俳集〕』

— 解 說 —

○『〔辰初春大隅連雜俳集〕』

横本・写一冊（鹿屋市公民館所蔵）

本集が鹿屋の公民館に伝存していることを知ったのは、田中道雄氏が同公民館に所蔵書の調査に赴かれての結果による。その後、橋口晋作氏が同公民館を訪ねて本集を借用してこられたので、それによって書誌的なことを次に記すことにする。横本。表紙は焦茶色で、薄い紙がいく重にも貼り合わされた厚紙である。墨付四九丁。一面五句。たて十八・五センチ、よこ二十六センチ。既に翻刻紹介ずみの雜俳集とほぼ同様の体裁を有する。

内容は「互に無事を聞て悦」

「はらのたつ事く」

の題による前句付と、

「打しほれ」

の題による笠付（冠付とも）の雜俳集である。出句者については、本集に昭和三十二年十月十九日伊地知栄次郎氏による次のごとき記録が付載

されている。

歌会々合者

鹿屋三猿 右田此右エ門 知足伊地知□エ門 醉猫 清書

松風 山住 初入 掉舟

風立 女童 鬼象 翫月

柳好 酒泉 芦角

大根占山鳩 三水 吟月 白人

未山 离博 留鳥 川童

秋好 黒蝶 水昌

志布志懐月 耳鳥 雲風 三山

串良蔵六 黄雀 老楽 未見

三甫 志訓 牛苗

大崎香松 山下歌右エ門 野月 雲風

大始良霞松

以上四十一名也

此俳句集は右田此右エ門時代に記録したものと認む此右エ門藤原顕輝と称して当郷の旧家であった此右エ門は寛政四年生れ文政十一年郷内の五名と伊勢参宮をした人である頗る歌道に長した学者にして斯の参詣日誌を読んで一きわ是感を深くする墓は打馬の上にある辞世の一首も刻してある文久二年新田神社の歌人三松来鹿の記事中にも右田三猿とあれば藩内知名の歌人であったことが思はれる此歌集は辰の年とあ

『辰初春大隅連雑俳集』 『無量集』

——南九州の国文学関係資料(八)——

子
 母の成
 用く
 娘

初春大隅連の
 雑俳集

橋口晋作
 福井迪子
 大内初夫

母の成
 子

娘

用く

辰初春大隅連の
 雑俳集